

金久保内出遺跡 (第3次) 上里町

「立地と環境」

金久保内出遺跡は、児玉郡上里町金久保に所在し、JR高崎線神保原駅から北西3kmに位置している。遺跡の所在する児玉郡上里町は、東を本庄市、南を児玉郡神川町、神流川を挟んで西を群馬県藤岡市、烏川や利根川を挟んで北を佐波郡玉村町と接している。



調査区位置図

標高は約59・8mである。遺跡の北側と西側は、神流川が流れる低地に向かい傾斜している。この神流川は烏川、利根川と合流し、遺跡はこれから河川の結節点に位置している。このほかに、遺跡の北側に忍保川、東側には御陣場川など利根川水系の小規模な河川が存在する。

上里町には、古墳時代後期の群集墳である旭・小島古墳群や大御堂古墳群、青柳古墳群、帯刀古墳群が存在する。また、金久保内出遺跡の北側に毘沙吐古墳群が位置している。

周辺から埴輪片もわずかながら出土している。古墳時代の集落遺跡には、神流川扇状地の原遺跡、前原遺跡や田通遺跡、北稻塚遺跡、金久保内出遺跡がある。今年度調査が行われた下長塚遺跡においても、古墳時代の竪穴住居跡が7軒確認されている。金久保内出遺跡において、見つかった竪穴住居跡のほとんどが古墳時代で、周辺には古墳時代の集落が広く分布していたと考えられる。

奈良・平安時代の遺跡では、前述の田通遺跡、北稻塚遺跡のほか、寺西遺跡や油免遺跡が平安時代前期とされている。平安時代中頃から後期にかけては、田中西遺跡、日月遺跡、水引塚遺跡、中長遺跡、中堀遺跡があるが、竪穴住居跡の数が徐々に減少していく傾向が見られる。また、神流川沿いの大字五明やその周辺で

五明廃寺より出土した瓦は、上野国新田郡の寺井廃寺(現・群馬県太田市)や佐位郡の上植木廃寺(現・群馬県伊勢崎市)と文様が共通しており、上野国との関連が指摘されている。

鎌倉時代の遺跡として、金窪城(館)跡が金久保内出遺跡の北東にある。また、神流川に沿うようにして、安保氏館跡、長浜氏館跡、勅使河原氏館跡など、鎌倉武士団丹党に關係する館跡が見られる。戦国時代末期の滝川氏と後北条氏が神流川を挟んで衝突した神流川合戦では、金窪城跡が滝川方の攻勢によって落城したとの記録が残る。

金久保内出遺跡は、昭和56年に県営圃場整備事業上里北部地区工事に伴い、上里町教育委員会が第1次調査を行った。令和4年度からは、一般国道17号(本庄道路I期)建設事業に伴い、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が調査を行

- 所在地
児玉郡上里町大字金久保 989 他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月~令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
8,228㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
- 第1地点
縄文(土器集中2)、古墳(住居跡2)、奈良(住居跡2)
- 第3地点
縄文(住居跡1・土器集中1)、古墳(土器集中5・住居跡34・土壇20・ピット85)中・近世(土壇墓3・土壇160・溝跡7・柵跡1・ピット450)
- 第4地点
縄文(土器集中1)、古墳(住居跡16)、中・近世(土壇墓2・土壇80・井戸跡2・溝跡18・ピット140)



第1地点調査区全景

「発見された遺構」

第1次調査では、古墳時代後半から奈良時代にかけての竪穴住居跡、第2次調査では、縄文時代の遺物集中、奈良・平安時代の竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土壇、溝跡、中・近世の掘立柱建物跡、土壇墓、土壇、溝跡、ピットなどが検出された。

第3次調査では、第1地点、第3地点、第4地点を調査した。地点は、町道(三国街道)を挟んだ東側を第1地点、西側を第3地点とした。



第1地点 第42号住居跡 遺物出土状況

今年度から調査した第4地点は、第3地点の東側に位置している。なお、第2地点の調査は令和4年度に終了している。調査では、縄文時代、古墳時代、奈良時代、中世の遺構が検出された。なお、遺構番号は第2次調査から継続して付した。

第1地点

第3次調査では、第二面の調査を行い、縄文時代の遺物包含層、古墳時代から奈良時代にかけての住居跡が検出された。

縄文時代の遺構は確認できなかったが、調査区の西端と東端で、それぞれ縄文前期の土器集中2箇所が検出された。

古墳時代の遺構は、住居跡が2軒検出された。第44号住居跡は、南北軸約5.5m、東西軸約6mの大型の住居跡である。カマドの残存状況は良好で、燃焼部から煙道にかけて残存長約2mあり、左右のソデ内部からは、構築材に転用された土師器壺一対がほぼ完形で出土した。

奈良時代の遺構は、住居跡が2軒検出された。第42号住居跡は、床面の直上から8世紀後半と

考えられる須恵器鉢蓋が出土した。

第3地点

第2次調査では、第一面の調査を行い中・近世の土壇、溝跡、ピットなどが検出された。第3次調査では、第2次調査から続く第一面の調査を行ったのち、第二面の調査を行った。第二面では縄文時代の土器集中や、古墳時代の竪穴住居跡、土壇、ピット、土器集中などが検出された。

縄文時代の遺構は、調査区の西端から縄文時代前期の竪穴住居跡、土器集中1箇所が検出された。第82号住居跡からは、土器片、黒曜石製の石鏃や剥片などが出土した。

古墳時代の竪穴住居跡は多くが重複して検出された。古墳時代後期の住居跡が調査区西側に集中し、古墳時代終末から奈良時代初頭の住居跡は調査区の東側と西側に分布していた。後期の住居跡は、ほとんどが一辺5m前後の規模であった。第67号住居跡、第70号住居跡は残存状態が良好で、カマドの燃焼部から土師器が伏せられた状態で出土し、カマド廃棄に伴う祭祀に関連する遺物と推測される。古墳時代終末から奈良時代初頭の竪穴住居跡は、残存状態が悪かった。調査区西側の



第1地点 縄文土器出土状況

区西側の



第3地点調査区全景

第83号・第84号・第86号住居跡からは、8世紀前半の土師器環や甕が出土した。調査区西側からは、古墳時代の土器集中箇所5箇所が検出された。なかでも、調査区中央北側より位置する6世紀代に形成された土器集中4は、南北7m、東西4mの範囲から多量の土器が出土した。遺物は土師器環や甕がほとんどである。土師器環は重ねられた状態で出土した。また、一部に須恵器台付長頸壺や白玉が確認できた。土器集中は周辺の竪穴住居跡と重複がなく、7世紀後半まで埋没せずに当時の地表面から確認できる状態にあったことが確認された。何らかの特別な意味を持つ遺構と考えられる。

第一面の中世の第458号・509号・511号土壇の3基は、人骨が残存していた土壇墓である。第458号土壇は、横向きで

屈葬されていたと考えられ、人骨は腕と脚部の一部のみ見つかった。人骨の大きさから成人と見られるが、性別は不明である。第509号土壇は、横向きで屈葬され、東向きに埋葬されたようである。脚部から胸部にかけて永楽通宝6枚が出土した。人骨の大きさから成人と見られる。第511号土壇は、頭部及び上半身は西を向き、



第3地点 第70号住居跡



第458号土壇 人骨出土状況

しみずみなみ 清水南遺跡 (第2次) 上里町

「立地と環境」

清水南遺跡は、JR高崎線神保原駅から北西に約1・4kmの上里町金久保内に所在し、神流川によって形成された自然堤防上に立地する。

遺跡の周辺は、三つの河川が合流する。南西部から神流川が北流し、西部から流れる烏川と合流する。さらに北東部で烏川と利根川が合流する。清水南遺跡は、そうした河川の合流点に位置している。また北部を流れる烏川との間には、忍保川が東流している。

遺跡は、昭和52年に、忍保川の用水路新設工事に伴い第1次調査が実施され、古墳時代から奈良時代頃の集落跡が検出された。縄文時代の遺構は確認されていないが、遺構等から縄文前期の土器や石器などが出土しているため、周辺に集落が存在する可能性がある。

古墳時代になると周辺には、集落が営まれた。隣接する金久保内出遺跡では5世紀後半から9



調査区位置図

調査区は道路を挟んで3箇所に分かれている。東側を第1地点、西側を第2地点、北東部を第3地点とし、第1地点と第3地点を先行して調査し、その後第2地点の調査を実施した。

古代
古代の遺構は竪穴住居跡4軒、土壇1基が確認された。遺構は、主に第2地点の北側から第3地

点にかけて検出され、集落は遺跡の北側に広がっていたと考えられる。竪穴住居跡はいずれも第2地点から検出された。西側から検出された第1



第3号竪穴状遺構

第1地点中央部から確認された第1号掘立柱建物跡は、長軸11・8m、短軸6・0mの規模である。柱穴が二重に巡り、母屋の周囲に下屋または濡れ縁が巡る構造と推測できる。建物の中央部にも柱穴が検出されたことから、床張りの建物と考えられる。柱穴内からは、母屋部分で30×40cm、下屋部分で1・0×15cm程の深さから柱を支える礎板石が検出された。特に中央部の礎板石が大きく、幅、厚さともに40cm程ある石が据え付けられていた。また礎板石が複数確認された柱穴があることなどから、何度か建て替えられたと考えられる。

第1号掘立柱建物跡の南側には、竪穴状遺構が8基検出された。8基のうち3基が断面形態がすり鉢状になるもの、5基が断面形態が箱形

世紀後半までの竪穴住居跡が確認されていることから、平安時代前期まで継続的に集落が営まれていたと考えられている。古墳時代から奈良・平安時代の集落は、神流川によって形成された自然堤防の縁辺部に多く分布する傾向がある。

中世では、金窪城跡が清水南遺跡の北西部に隣接する。平安時代後期に当たる治承年間(1177〜1181)に武蔵七党の一つである丹党に属する加治家季によって造られたという伝承がある。また元弘年間(1331〜1334)には金窪城が新田義貞によって修復され、畑時に城を守らせたという伝承も残る。

加えて、戦国時代には天正10年(1582)に発生した神流川合戦の際に、滝川一益によって攻め落とされたことでも知られている。

「発見された遺構」

清水南遺跡第2次調査では、古代の集落跡と、中世の掘立柱建物跡および区画施設と考えられる溝跡が確認された。



第2号竪穴住居跡

第2号住居跡は、いずれも遺物量は少なかった。第1号住居跡では床面から9世紀前半の須恵器壺、第2号住居跡のカマドからは8世紀後半の土師器壺が出土した。第2地点北壁際で検出された第3号、第4号住居跡は、覆土

中世の遺構は、竪穴状遺構8基、掘立柱建物跡4棟、土壇墓3基、火葬施設1基、土壇1基、溝跡4条が検出された。また遺物が出土しないため詳細な時期は不明だが、ピットの大半が中世と考えられる。遺構は調査区全体に分布する。

第1地点の南東部に遺構が密集するのに対し、第1地点の北東部および南西部と第2地点の東側は少ない。

- 所在地
児玉郡上里町金久保 1133 他
- 実施期間(事業者)
令和5年4月～令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
4,159 m²
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
古代(住居跡4・土壇1)
中世(竪穴状遺構8・掘立柱建物跡4・土壇墓3・火葬施設1・土壇1・溝跡4)
古代～近世(土壇49・溝跡6・ピット529)

I 令和五年度に調査をした遺跡



第1号掘立柱建物跡

また溝跡の堆積土を掘り込んで造られた土壇墓が検出され、永楽通宝と天聖元宝が副葬されていた。中世後半となる室町時代後期から戦国時代頃には溝跡の埋没が進み、墓域の一部として利用されていたと考えられる。溝跡覆土の中層～下層から、鎌倉時代から南北朝時代頃の遺物が出土した。溝跡の規模や形状からその頃に造られた区画溝と推察される。褐釉陶器は中国南方の製品と考えられる。関東地方では希少な遺物であり、特別な品物を手でできる人物がいた可能性がある。

第2地点の西壁際からは、土壇墓が3基確認された。うち2基からは遺存状態が悪いものの全身骨が検出され、銭貨が副葬されていた。判読可能なものには天聖元宝と永楽通宝があり、室町時代以降の墓と考えられる。また頭骨の一部のみが検出された土壇墓には、かわらけが副葬されていた。かわらけの形態から15世紀後半頃のものと考えられ、他の土壇墓も同時代の遺

になるもので、二分される。断面形態がすり鉢状のものうち2基は周囲にピットが巡り、建屋があった可能性がある。断面形態が箱形のもの、床面の中央部から焼土や炭化物が検出された。これらに伴う遺物が出土していないため性格は不明であるが、火を扱う作業を行う施設と考えられる。これらの竪穴状遺構からは、少量だが青磁碗やかわらけ、石製の硯などが出土した。いずれも鎌倉時代から南北朝時代頃のものと考えられる。

第2地点の西壁際から検出された第10号溝跡は、規模が幅約2.2m、深さ1mで断面形態が箱形になる。検出された長さは20mで、残り



第1号掘立柱建物跡 礎板石出土状況

粘土層が確認され、古い地割を継承する道路となっていた可能性がある。同層中からは、室町時代後期から戦国時代頃の摺り鉢

構であると考えられる。

第2地点の北東部では火葬施設が1基確認された。平面形態が丁字形になるもので、覆土下層には焼土や炭化物とともに大量の骨片が含まれていた。焼骨のため部位が判別できるものは少ないが、北側に頭骨の破片がまとまって検出され、横位で茶毘に付されたと考えられる。出土遺物がなく時期は不明だが、検出された土壇墓などの存在から中世段階のものである可能性がある。

「まとめ」

清水南遺跡では、古代の集落跡と、中世の遺構群が確認された。古代の遺構は第2地点の調査区北西部および第3地点で確認された。遺構の分布状況から、今回の調査区の北側に所在する金久保内出遺跡の古墳から平安時代の集落跡まで集落域が広がっているものと考えられる。

中世の遺構は調査区全域で確認された。第1



第1号火葬施設

地点の中央部では大型の掘立柱建物跡が検出された。掘立柱建物跡から出土した遺物は無いが、周辺の遺構の出土遺物などから、鎌倉時代から南北朝時代頃の建物跡である可能性がある。

第2地点では調査区西壁際で区画施設の可能性がある第10号溝跡が確認された。溝跡の中層からは、鎌倉時代から南北朝時代頃の遺物が出土している。第1地点で検出された第1号掘立柱建物跡と方向が揃っていることから、同時期に存在した可能性がある。第1号掘立柱建物跡に伴う区画溝であった場合、鎌倉時代から南北朝時代頃の方形に区画された館跡となる可能性がある。溝跡はその後、区画施設としての機能を失って埋没が進んだ。溝跡周辺には室町時代後半頃に土壇墓が分布し、区画施設があった頃の地割が墓域の境界となっていた可能性がある。その後、戦国時代頃には道路として使用されていたと考えられる。

また、溝跡から出土した鎌倉時代頃の瓦は、出土例が少なく注目される。中世で瓦を葺く建物は寺院等である。瓦が複数出土していることから、中世寺院の存在が考えられる。上里町内では堂裏遺跡からまとまった量の中世瓦が出土している。これらは清水南遺跡から出土した瓦とは特徴が異なり、生産地が異なるか、堂裏遺跡とは時期の異なる寺院が存在した可能性がある。

調査の結果、中世を中心とした遺跡であることが明らかとなった。特に大型の掘立柱建物跡と、区画溝の可能性がある溝跡の調査は当時の地域史を考えるうえで大きな成果となった。今後の調査で東側に区画溝が検出されれば、今まで知られていなかった館跡の発見につながる可能性がある。

みたけ 三竹遺跡（第4次）川島町

「立地と環境」

三竹遺跡は、比企郡川島町南東端の出丸中郷地先に所在し、入間川と荒川の合流点に近い堤外地に位置している。

川島町は埼玉県ほぼ中央に位置している。西に越辺川や都幾川、東に荒川、北に市野川、南に入間川と四方を河川に囲まれており、自然堤防上に遺跡が分布している。三竹遺跡も、この自然堤防上に立地する。

川島町では、旧石器時代の遺跡は発見されていない。縄文時代では、前期後葉から終末に管



調査区全景

まれた芝沼堤外遺跡や東野遺跡などの集落が、地表面から4〜5m下に埋没して検出されている。

古墳時代から遺跡数が増加する。自然堤防上に平沼一丁田遺跡、白井沼遺跡、富田後遺跡など前期の集落が管まれている。しかし、集落としては長続きせず、廣徳寺古墳や愛宕塚古墳、あるいは三竹遺跡の平成22年（2010）の調査で発見された第1〜3号墳など、後期に築かれる古墳群の時代には連続していない。

中世以降、12世紀後半の堂地遺跡を始めとした遺跡が検出されている。町内出土の794基を数える板碑の年号を追うと、集落が断絶することなく管まられたと考えられる。

近世に入ると、寛永6年（1629）に幕府が行った熊谷市久下の元荒川の付け替え（瀬替え）により、荒川が現在の荒川低地を流下する。流量が増した荒川は河川交通が活発となり、河岸や渡し場が管まれるようになった。三竹遺跡付近では、上尾市平方や畔吉の河岸が知られている。荒川に接続する入間川流域も河川交通網が広がり、遺跡の西側約400mには、金兵衛河岸（金兵衛渡し）があった。

第4次調査で検出された遺構は、中世の土壇、井戸跡、溝跡、近世の土壇、井戸跡、溝跡、ピット、時期不明の土壇、溝跡、ピットである。

中世
第7号井戸跡は径約1.5mの井戸跡である。土層から素掘りではなく、井筒として木桶等を設置して周囲を埋め戻すタイプの井戸であった

と考えられ、廃絶時に木桶は回収されたようである。陶器の破片等が出土した。掘り方の埋土中からは縄文時代後期の土器片が出土しており、調査区周辺に縄文時代の遺跡の存在が推測される。

第1号溝跡は、幅5m、深さ1m、総延長約70mにも及ぶ大溝である。第2号溝跡や第9号溝跡などいくつかの同一方向の溝跡と重複しながら、調査区を南北に縦断していた。令和4年度の調査で確認された大規模な区画溝に対応する可能性がある。北から南へと深くなるように掘削されており、入間川方向への排水を意図したと考えられる。最下層から、常滑産の甕など14世紀代の遺物が出土している。

近世
第12号井戸跡は径約1.5mの井戸跡である。土層から、第7号井戸跡同様に木桶等を設置して周囲を埋め戻すタイプの井戸であったと考えられ、廃絶時には木桶は回収されているようである。掘方の埋土下部からは焙烙や磁器碗の破片が出土している。

「まとめ」

三竹遺跡第4次調査の発掘調査では、中世、近世の遺構、遺物が出土された。なかでも、第1号溝跡は14世紀代までさかのぼる大溝である。令和4年度の調査成果とあわせれば、土地区画として掘削されたと推定できる。区画内の遺構から出土した遺物とともに、不明な点が多い川島町の中世を明らかにする良好な資料と考

- 所在地
比企郡川島町出丸中郷地先
- 実施期間(事業者)
令和5年12月～令和6年3月
(国土交通省関東地方整備局)
- 調査面積
1,300㎡
- 遺跡の種類
集落跡
- 主な遺構
中世(土壇2・井戸跡6・溝跡7)
近世(土壇3・井戸跡8・溝跡1・ピット12)
時期不明(土壇5・溝跡5・ピット50)

えられる。

なお、平成22年度(2010)調査や令和4年度の調査で検出された古墳群は今回の調査では検出されず、円筒埴輪の破片が数点出土したに留まった。

今回の発掘調査の結果、三竹遺跡は中・近世において、河川に面した経済活動の一端を担っていた遺跡であることが明らかとなった。



第1号溝跡